

# 非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

## 金

### 【海外】

#### 1. 価格推移

| 10 月相場         | 高値                | 安値             |
|----------------|-------------------|----------------|
| ロンドン相場(\$/toz) | : 1,236.05 (26 日) | 1,185.30 (1 日) |
| 国内建値(円/g)      | : 4,480 (24 日)    | 4,332 (11 日)   |
| 為替相場(円/\$、TTS) | : 112.89 (16 日)   | 115.42 (4 日)   |

10 月の海外金相場は、1 日に\$1,185.30/toz(トロイオンス)でスタート、月初から 5 日にかけてはドル高の進行で、水準としてはやや高いながらも\$1,200 水準を若干上回ったところでの展開となった。その後 8 日から 10 日にかけては\$1,200 水準を下回る展開となったが、11 日にはドル安基調から\$1,200 台を回復、それ以降、月末まで、\$1,200 台割れは一回も引き起こさなかった。中旬では、世界的な株安で金市場に投機資金が流入し、\$1,220~1,230 水準まで上昇した。だが、17 日に発表された米連邦公開市場委員会(FOMC)の議事要旨で米連邦準備理事会(FRB)が 12 月の追加利上げを示唆したことから、一時的に\$1,220 水準近くまで下げたが、同水準での推移は長くは続かなかった。

下旬では、米株式相場の乱高下やイタリア財政不安を受けて上昇、23 日以降は\$1,230~1,240 の高値圏での展開となった。しかし、月末では、ドルが主要通貨に対して上げ、ドルの代替投資先とされる金から資金が流出したことで続落、31 日には\$1,214.95 をつけて越月した。

#### 2. 為替相場推移

10 月の為替相場は 1 日に\$1=114.92 円(TTS 相場、以下同じ)と円安基調のなかスタート、米金利の先高観などを背景に市場参加者の円売り・ドル買いが続いたうえ、国内輸入企業の円売りや日経平均株価の上昇に連動した円売りも円相場を押し下げた。4 日に\$1=115.42 円と 2017(平成 29)年 3 月以来 1 年 7 か月ぶりの円安・ドル高水準となった。

ところが、9 日以降、下旬にかけては、反対にやや円高基調になり、\$1=113 円水準を中心にした展開となった。8 日の人民元や中国株式相場の急落で運用リスクを取りにくくなった投資家からの円買い・ドル売りが先行、その後も日経平均株価の大

幅下落を背景にした円買いが続いたことが円上昇要因となった。ちなみに、10日に米株式市場が大幅安に見舞われたが、円相場への上昇圧力は限定的だった。

中旬の16日には、ムニューシン米財務長官が通貨安誘導を封じる為替条項を日本にも求める考えを示したことなどを受けて日経平均株価が大幅に下落、その株安を背景に、運用リスクを回避する目的の円買い・ドル売りが優勢となったことで、\$1=112.89円と約1か月ぶりの高値を付けた。その後は、日米等の不安定な株価の動きに合わせた展開となったが、\$1=113円水準から大きく離れることはなかった。29日には、米国株式相場の大幅下落から円が反発したが、すぐに米中の貿易摩擦が激しくなるとの懸念からドルが買われ、31日には\$1=114.26円とほぼ月初水準並みとなって越月した。

10月是对ユーロで円が上昇基調を辿った。上旬は€1=132~133円水準だったが、中旬では、日米等の株価下落で€1=130円水準へ、下旬では、イタリアの財政不安や英国の欧州連合(EU)離脱交渉を巡る先行き不透明感から€1=129円水準へ切り上げた。

## 【国内】

### 1. 建値推移

10月の国内金山元建値は円安基調から概ね4,400円台を堅調推移した。

1日に4,379円/g(グラム)でスタート、3日には4,400円台に達した。9~11日と同水準を割り込むも、11日には4,400円台に復帰した。その後はほぼ4,400円台後半で推移、31日には4,473円と月初を100円上回る水準で翌月入りした。

### 2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2018年9月分=平成30年9月分)

生産 : 11,610 kg (前月比 11.6%増、前年比 41.3%増)

出荷 : 11,073 kg (前月比 12.9%増、前年比 21.3%増)

在庫 : 5,931 kg (前月比 10.0%増、前年比 35.2%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

9月の生産は前月比、前年同月比とも大幅増。前年同月比は8か月連続の増。出荷も前月の反動から前月比、前年同月比とも増。在庫は生産増から前月比、前年同月比とも増。

銅

## 【海外】

2018年10月のLME銅相場はドル高を主因に前月に引き続き\$6,100~6,200/t圏

を頭重く推移した。

米国経済をめぐっては、9月30日、北米自由貿易協定(NAFTA)に代わる米墨加貿易協定(USMCA)が最終合意された。雇用状況は新規失業保険申請件数が200千件際、9月の失業率が3.7%といずれも1960年代末以来の低水準で推移。第3四半期GDP成長率は前期比3.5%と前期の4.2%から鈍化したが、前年同期比は3.0%増と2015年第2四半期以来の大幅な伸びで、トランプ政権が掲げる今年の成長率目標である3.0%増を達成できる見込み。こうしたなか、10年債利回りは2011年以來の3%台に乗せ、ドルは月末にかけて8月以來の\$1.13台に上昇した。

中国経済は第3四半期GDPが前年同期比6.5%増と2009年第1四半期以來の低い伸びにとどまり、10月の国家統計局製造業景気指数(PMI)は2016年7月以來の低水準に落ち込んだ。国内外の需要が減退し、米国との貿易戦争激化による経済への影響が強まっている可能性が示された。このため、中国政府は減税規模を拡大し、企業負担を減らすと同時に個人向け減税を実施する方針を示した。

一方、中国の9月の未加工銅及び銅製品輸入は521千tと2016年3月以來の高水準、銅精鉱輸入は1.93百万tで史上最高を記録した。廃棄物輸入規制強化に伴う銅スクラップ輸入の減少が主因とされる。中国は今年、輸入スクラップ中の異物混入比率を引き下げ、米国からの輸入に25%の関税を課した。SHFE/ロンドンのアービトラージウインドウの開放も銅輸入を押し上げた。これに対して、LME在庫は月初から40千t以上も減少し、月末にかけて150千t割れへと2016年4月以來の低水準に減少している。

供給障害要因としては、コデルコのチュキカマタ銅製錬所(チリ)は11月半ばまで操業度の引き下げを余儀なくされる。9月にエルテニエンテ転炉が故障したことに加え、チリ新環境規則が12月13日付で施行され、二酸化硫黄及び砒素の回収率が現行の90%から95%に引き上げられることによるもの。同製錬所は硫酸プラントの新規導入が1月半ば、操業開始は2月と見込まれるため、それまで操業停止を余儀なくされる。

インド国家グリーン審判所はツーチコリン銅製錬所閉鎖の可否に関する審理を11月末まで延長した。最終決定は9月末に下す予定であったが、近隣住民やタミールナヅゥ州の各政党の意見聴取や大気、水質の調査を続行する。同製錬所は3月から操業を停止中で、5月には州政府から閉鎖命令を下された。生産能力を現在の400千t/年から2020年末までに倍増する計画は地元住民が環境汚染懸念を理由に強く反対している。これを受けて、LMEはスターライトカパー“STERLITE”銅カソードの受け渡しを2019年1月16日から停止する。

一方、BHPビリトン(豪)は10月9日、オリンピックダム銅製錬所(豪)の操業を10月中に再開する見通しを明らかにした。同製錬所は8月に硫酸プラントのボイラー管の故障のため閉鎖されたが、10月中に改修工事が完了する。

需給動向については、国際銅研究会によれば、2018年1～7月の世界の銅鉱石生産は前年同期比4.5%増の11,757千t、地金生産は1.5%増の13,672千t、消費は1.3%増の13,829千t、地金需給バランスは▲188千tから▲157千tへと供給不足で推移している。報告在庫は2.4%増の1,454千t、在庫/消費比率は3.1週間から2.9週間へと低水準で推移している。

鉱石生産の内訳は精鉱が4%、SXEWは5.5%増加した。国別にはチリが前年2～3月にストに見舞われたエスコンディーダ鉱山の反動増とコデルコの生産水準の回復により11%増加、1～4月に精鉱輸出が禁止されたインドネシアが30%増加した。コンゴ民主共和国(DRC)はSXEW生産が15%増加、ザンビアは休止鉱山の再開により11%増加した。この間大規模な供給障害はなかったが、カナダ、米国は一部の鉱山の生産低下のためそれぞれ6%、7%減少した。ここ数年、鉱山の新規稼働や能力増強により急増していたペルーは伸びが平準化した。地域別にはアフリカが10%、ラテンアメリカは8%、アジアは5.5%、オセアニアは7%増加したが、ヨーロッパは横ばい、北米は5%減少した。鉱山稼働率は80.1%から82.2%に上昇した。

地金生産の内訳は一次生産が横ばい、二次生産は6%増加した。国別には中国が能力増強を背景に増加した。チリは5%増加した。SXEW生産が前年同期のエスコンディーダ鉱山ストの反動で3.2%増加、電解生産はコデルコの生産水準の回復により8%増加した。昨年ストライキに見舞われたインドネシア、大型定修があった日本も実質的に回復した。DRC、ザンビアのSXEW生産も増加した。一方、4月にツーチコリン製錬所が閉鎖されたインドは22%減少、オーストラリア、フィリピン、ポーランド、米国は定修や操業トラブルの影響で減少した。地域別にはアフリカが13%、アジアは1%、ラテンアメリカは4%増加したが、ヨーロッパは実質的に横ばい、北米は4%、オセアニアは7%減少した。精製工場の稼働率は85.0%で横ばい推移した。

中国の見掛け消費(未報告在庫の増減を除外)はネット輸入が20%増加したことから4%増加した。中国の輸出入統計は3月以降公表されていないため、4月以降は推定値。中国を除く世界の消費は1%減少した。その他の主要国ではインド、日本、EUが増加したが、台湾、韓国、米国は減少した。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

|      |     |      |     |      |     |       |     |       |     |       |     |
|------|-----|------|-----|------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|
| 9/25 | 750 | 10/4 | 770 | 10/9 | 750 | 10/16 | 740 | 10/19 | 730 | 10/24 | 740 |
| 11/1 | 720 | 11/5 | 760 |      |     |       |     |       |     |       |     |

### 2. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2018年9月分=平成30年9月分)

|    |            |                       |
|----|------------|-----------------------|
| 生産 | : 129,450t | (前月比 4.1%減、前年比 7.7%増) |
| 出荷 | : 130,828t | (前月比 1.0%増、前年比 2.9%減) |

在庫 : 102,779t (前月比 0.9%減、前年比 4.8%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2018(平成 30)年 9 月の銅地金生産は前月比 4.1%減、前年同月比 7.7%増の 129.5 千tと、それぞれ 3 か月ぶりの減少と 2 か月連続の増加となった。出荷は前月比 1.0%増、前年比 2.9%減の 130.8 千tで、それぞれ 3 か月ぶりの増加と 5 か月ぶりの減少。内訳は内販が前月比は需要部門の夏季休暇の影響の反動から 9.7%増、前年比は 3.1%減の 79.0 千tと 2 か月ぶりの減少。輸出は前月比 9.9%減、前年比 2.7%減の 51.8 千tと 5 か月ぶりの減少。内販のうち電線向けは前年比 0.1%減の 49.5 千tと 2 か月ぶりの減少。伸銅品向けは 5.0%減の 26.6 千tで 4 か月連続の減少。在庫は前月比 0.9%減、前年比 4.8%減の 102.8 千tで、それぞれ 3 か月ぶりとは 4 か月連続の減少となった。

### 3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、2018(平成 30)年 9 月の銅電線出荷は前月比が夏季休暇の影響の反動で 3.3%増、前年同月比は 5.5%減の 56.9 千t(推定)と前年比は 6 か月ぶりの減少となった。うち内需は前年比 3.9%減の 55.1 千tで 6 か月ぶりの減少、輸出は 36.8%減の 1.8 千tで 2 か月連続の減少。内需は全部門が減少し、建設電販が 6 か月ぶり、電力は 4 か月ぶり、電気機械と自動車は 3 か月ぶり、通信は 2 か月ぶり、その他内需は 2 か月連続の減少となった。

日本伸銅協会によれば、2018(平成 30)年 9 月の伸銅品生産は前月比 11.9%増、前年同月比は 1.1%減の 67.1 千t(速報)と前年比は 4 か月連続で減少した。うち内需向けは前年比 0.4%減の 56.0 千tで 2 か月ぶりの減少、輸出は 4.4%減の 11.1 千tで 4 か月連続の減少。品種別には、エアコン向けの銅管が 2 か月連続、自動車端子向けの黄銅条は 2 か月ぶりに増加したが、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条は 4 か月連続、コネクタ向けの青銅板条は 2 か月連続の減少となった。

鉛

### 【海外】

2018 年 10 月の LME 鉛相場はドル高を主因に \$2,000/t 水準を弱含み推移し、月末にかけて 2016 年 12 月以来の \$1,900 割れとなった。

米国経済をめぐっては、9 月 30 日、北米自由貿易協定(NAFTA)に代わる米墨加貿易協定(USMCA)が最終合意された。雇用状況は新規失業保険申請件数が 200 千件際、9 月の失業率が 3.7%といずれも 1960 年代末以来の低水準で推移。第 3 四半期 GDP 成長率は前期比 3.5%と前期の 4.2%から鈍化したが、前年同期比は

3.0%増と2015年第2四半期以来の大幅な伸びで、トランプ政権が掲げる今年の成長率目標である3.0%増を達成できる見込み。こうしたなか、10年債利回りは2011年以来の3%台に乗せ、ドルは月末にかけて8月以来の\$1.13台に上昇した。

中国経済は第3四半期GDPが前年同期比6.5%増と2009年第1四半期以来の低い伸びにとどまり、10月の国家統計局製造業景気指数(PMI)は2016年7月以来の低水準に落ち込んだ。国内外の需要が減退し、米国との貿易戦争激化による経済への影響が強まっている可能性が示された。このため、中国政府は減税規模を拡大し、企業負担を減らすと同時に個人向け減税を実施する方針を示した。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2018年1～8月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比1.3%減の2,965千t、地金生産は7,593千t、消費は7,707千tでともに横ばい、地金需給バランスは前年同期の▲120千tから▲114千tへと供給不足で推移した。

鉱石生産はヨーロッパが2.8%、アフリカは3.2%増加、アジアは横ばい、アメリカは4.1%、オセアニアは7.0%減少した。地金生産はオセアニアが3.6%増加、アジア、アメリカ、アフリカは横ばい、ヨーロッパは1.8%、アフリカは1.4%減少した。消費はアフリカが1.3%増加、アジア、ヨーロッパ、オセアニアは横ばい、アメリカは3.9%減少した。8月末の地金の報告在庫は前年同月比19.6%減の391千t、在庫/消費比率は2.3週間から1.8週間にやや低下した。

中国は鉱石生産が1.0%減の1,362千t、鉛精鉱輸入は21.7%減の137千t、地金生産は2.3%減の3,095千t、地金の輸出入は+25千tから▲5千tへとネット輸出に転じた。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は3,219千tの横ばいとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

9/3 292      11/1 274

10月の鉛建値はLME鉛相場が\$2,000/t水準前後の小動きだったため、月中の改訂はなかった。

### 2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2018年9月分=平成30年9月分)

|    |           |                        |
|----|-----------|------------------------|
| 生産 | : 17,336t | (前月比 0.5%減、前年比 1.5%減)  |
| 出荷 | : 17,377t | (前月比 15.4%増、前年比 2.6%増) |
| 在庫 | : 15,370t | (前月比 0.4%減、前年比 32.8%増) |

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

9月の生産は前月比、前年同月比とも減。出荷はここに来て蓄電池向けの販売増から前月比増。前年同月比も輸出が2か月連続で1千t台となったため、2か月連

続の増。在庫は前月比微減だが、前年同月比は7か月連続の増。

### 3. 需要部門動向

8月の自動車生産台数は前年同月比0.3%減の693,977台となり、3か月連続で前年同月を下回った。乗用車は前年同月比3か月連続のマイナス、トラックも同7か月ぶりのマイナス、しかしバスは同3か月ぶりのプラスとなった。

9月の自動車輸出台数は前年同月比7.5%減の392,020台となり、2か月ぶりに前年同月を下回った。

一方、8月の二輪車生産台数は前年同月比4.8%減の38,536台と4か月ぶりに前年同月を下回った。

(一社)電池工業会の調査によると、8月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で1,825千個(前年同月比4%増)と3か月ぶりに上昇したが、自動車用以外の鉛蓄電池は554千個(同7%減)と再び減少した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで2,379千個(同1%増)と3か月ぶりに上昇した。

鉛関連製品生産統計

|          |          | 7月      | 8月      |
|----------|----------|---------|---------|
| 自動車      | 数量(台)    | 801,778 | 693,977 |
|          | 前年同月比(%) | 98.0    | 99.7    |
| 自動車用鉛蓄電池 | 数量(鉛量t)  | 17,888  | 14,108  |
|          | 前年同月比(%) | 103.7   | 102.1   |

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

## 亜鉛

### 【海外】

2018年10月のLME亜鉛相場はやや動意づき、前月比一段高の\$2,600~2,700/t圏を底堅く推移するとともにバックワーデーションが拡大した。

この背景として、LME在庫は月初の200千t水準から月末にかけて3月初め以来の155千t台へと急減している。LME在庫は投機筋によるワラント移動で急増、急減を繰り返しており、今回はロング筋がスクウィーズを仕掛けたとみられる。加えて、中国の生産減少による現物不足もLME在庫減少の一因とみられる。

米国経済をめぐるのは、9月30日、北米自由貿易協定(NAFTA)に代わる米墨加貿易協定(USMCA)が最終合意された。雇用状況は新規失業保険申請件数が200

千件際、9月の失業率が3.7%といずれも1960年代末以来の低水準で推移。第3四半期GDP成長率は前期比3.5%と前期の4.2%から鈍化したが、前年同期比は3.0%増と2015年第2四半期以来の大幅な伸びで、トランプ政権が掲げる今年の成長率目標である3.0%増を達成できる見込み。こうしたなか、10年債利回りは2011年以来の3%台に乗せ、ドルは月末にかけて8月以来の\$1.13台に上昇した。

中国経済は第3四半期GDPが前年同期比6.5%増と2009年第1四半期以来の低い伸びにとどまり、10月の国家統計局製造業景気指数(PMI)は2016年7月以来の低水準に落ち込んだ。国内外の需要が減退し、米国との貿易戦争激化による経済への影響が強まっている可能性が示された。このため、中国政府は減税規模を拡大し、企業負担を減らすと同時に個人向け減税を実施する方針を示した。

供給障害要因としては、タイタンマイニングのエンパイアステート亜鉛鉱山(米)で10月2日、坑内作業員の死亡事故が発生した。このため、翌10日は操業を全面停止し、その後は事故現場以外の操業を再開したが、米労働省鉱山安全保健局(MSHA)による調査のため生産水準は低下した。同社は22日、MSHAの調査が完了し、事故現場での採掘を除いて正常操業に復帰したと発表。

ニューセンチュリーリソーシズはセンチュリー亜鉛鉱山(豪)の亜鉛精鉱の長契出荷開始時期を12月に延期した。同プロジェクトは9月、テイリングから亜鉛精鉱の生産を開始し、スマルターはトレーダーと長期販売契約を結んだ。しかし、精鉱中の鉛品位が契約条件の基準値を上回ったため、中国スマルターにスポット販売された。

永豊の石浦亜鉛製錬所(韓国)は環境団体や住民が飲料水として利用される洛東江に廃棄物を排出していると裁判所に訴えられた。韓国環境部は4月、この訴えを支持し、20日間の操業停止(実際には能力以下での操業の2か月間継続)を命じた。これに対して、永豊は行政審判手続を要求したが、奉化郡中央行政諮問委員会は10月23日、4月の決定を支持した。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2018年1~8月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比2.0%増の8,341千t、地金生産は8,687千t、消費は8,979千tとともに横ばい、地金需給バランスは前年同期の▲361千tから▲292千tへと供給不足で推移した。

鉱石生産はアメリカが3.5%、ヨーロッパは4.0%、オセアニアは20.5%、アフリカは1.8%増加、アジアは1.7%減少した。地金生産はヨーロッパが3.7%、アメリカは8.2%、オセアニアは9.3%増加、アジアは1.9%、アフリカは14.3%減少した。消費はヨーロッパが1.3%、アメリカは2.8%、オセアニアは4.0%増加、アフリカは18.0%減少した。8月末の地金の報告在庫は前年同月比7.2%減の1,016千t、在庫/消費比率は4.1週間から3.9週間へと横ばいであった。

中国は鉱石生産が1.8%減の2,848千t、亜鉛精鉱輸入は21.8%増の396千t、地金生産は1.3%減の3,695千t、地金のネット輸入は151.9%増の136千t、この結果、



見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は 4,170 千tで横ばいであった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

|       |     |       |     |       |     |      |     |      |     |      |     |
|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|
| 9/3   | 325 | 9/10  | 316 | 9/18  | 298 | 9/25 | 343 | 10/1 | 352 | 10/4 | 358 |
| 10/12 | 346 | 10/23 | 355 | 10/26 | 352 | 11/1 | 337 |      |     |      |     |

10月はLME 亜鉛建値が\$2,600/t 台から月央にかけて\$2,700 台へ上昇したことで、亜鉛建値はほぼ 350 千円/t 前後を堅調推移したが、月末に LME が急落したために 11 月初めに 337 千円へ下方修正された。

### 2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2018年9月分=平成30年9月分)

|    |           |                        |
|----|-----------|------------------------|
| 生産 | : 38,052t | (前月比 1.7%増、前年比 14.2%減) |
| 出荷 | : 45,716t | (前月比 11.5%増、前年比 1.5%減) |
| 在庫 | : 58,757t | (前月比 11.5%減、前年比 4.6%増) |

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

9月の生産は前月比増だが、前年同月比は八戸製錬所の定修から再び減。出荷は前月(8月)、夏期休暇による内販減と西日本集中豪雨によるめっき関連企業での需要減から前月比、前年同月比ともマイナスとなったが、9月では回復し、前月比プラスとなった。輸出増も寄与した。だが、前年同月比では前年レベルに届かず4か月連続のマイナスとなった。在庫は3か月連続の前月比減だが、前年同月比は6か月連続の増。

### 3. 需要部門動向

9月の鉱工業生産指数は前月比1.1%減、前年同月比2.9%減の101.4(季節調整済、2010年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は2か月ぶりの低下、前年同月比は3か月ぶりの低下となった。経産省は9月の生産の基調判断を「緩やかに持ち直しているものの、一部に弱さがみられる」に据え置いた。7~9月期の鉱工業生産指数は前期比1.6%低下し、102.1だった。低下は2期ぶり。自然災害の影響で出荷が伸び悩み、生産を抑える動きが広がった。

生産指数は15業種のうち11業種が前月から低下した。輸送機械工業は前月比2.5%減。はん用・生産用・業務用機械工業は同1.4%減だった。鉄鋼業も同3.6%減となった。

9月の出荷指数は前月比3.0%減の98.5と2か月ぶりに低下、前年同月比も3.4%減と3か月ぶりの低下となった。

一方、在庫指数は前月比2.3%増の113.3、在庫率指数も前月比7.8%増の123.5

となった。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、10月が前月比6.0%の上昇、11月は同0.8%の低下を見込んでいる。

8月の亜鉛めっき鋼板生産は前年同月比3か月ぶりの減となった。

8月の伸銅品生産量は59,930t(確報値、対前年同月比▲0.1%) (対前月比▲13.9%)、3か月連続して対前年同月を下回ったが、8月については計画的な休日による稼働日要因が大きい。水準的には前年並みの6万t前後を維持している(6月▲3.3%、7月▲0.3%)。全14品種中、対前年比プラスは7品種。内需向け49,595t(速報値、以下同じ)、3か月連続の対前年比マイナス(▲0.6%)。輸出向け9,618t、3か月連続の対前年比マイナス(▲4.5%)。黄銅製品では、黄銅条が7,648t(対前年比▲2.0%)、4か月振りの対前年比マイナス。黄銅棒は14,387t、3か月振りのプラス(対前年比+0.5%)。ガス機器、水栓金具、バルブ、自動車ともに大きな変化なく堅調である。

#### 亜鉛関連製品生産統計

|         |          | 7月        | 8月        |
|---------|----------|-----------|-----------|
| 亜鉛めっき鋼板 | 数量(千t)   | 866       | 846       |
|         | 前年同月比(%) | 102.0     | 94.5      |
| 黄銅製品    | 数量(t)    | 28,747    | 25,754    |
|         | 前年同月比(%) | 99.4      | 101.1     |
| 亜鉛ダイカスト | 数量(kg)   | 1,664,866 | 1,363,146 |
|         | 前年同月比(%) | 97.1      | 93.3      |
| 亜鉛華     | 数量(t)    | 5,776     | 4,402     |
|         | 前年同月比(%) | 95.0      | 124.1     |

(出所:(一社)日本鉄鋼連盟、経済産業省生産動態統計調査)